「希望の一本松」

大館市教育委員会　教育長　　高　橋　善　之

砂金採りで気仙地方に遠征した際は，陸前高田市の海辺にあった「道の駅　松原」を定宿にしていた。陸前高田市は古代から「黄金の気仙」といわれたエリアの中心点に位置し，どの川に出撃するにも便利な駅であった。岩手や宮城に在住する「みちのく砂金研究会」の仲間たちともこの駅で合流し，ホヤを肴に杯を重ねながら，見果てぬ夢を追い続けたものであった。

３月１１日，必要な処置を終えて家に帰り着いたのは午後１０時過ぎであった。蝋燭の下で食事を済ませ，ニュースを見るために再び外套を着て車に戻った。映し出された画面に衝撃を受けた。陸前高田の街が渦巻く濁流に呑まれていた。黒い海の沖合に，白地に青い二本線が描かれた道の駅の最上部だけが水面から突き出ていた。全滅という言葉に慄然とし，身じろぎさえできなかった。

やがて水は引いたものの，啄木が「一握の砂」を詠んだ白浜も，７万本の松林も壊滅し，ただ１本の松だけが残った。５月，その「希望の一本松」を遠望した。遮るものが何一つない廃墟の果てに，静まりかえった紺碧の海を背景として，天空に向かってすくっと立っている姿は，生命の灯のように輝いて見えた。しかし，９月に再び訪れた際には，葉も赤茶けた瀕死の姿に，最後の希望も潰えたように感じられた。ところが，１０月，この松の枝の挿し木や種子から若芽が育ちつつあるとの報道があり，再び希望の灯火が点った。「どんなに社会が破壊されようとも，大人は灯火を高くかかげ，希望を語れ。子どもたちが健やかに育つ限り必ず未来は拓ける。」と，教えられた。

「名　　刺」

大館市教育研究会　会　長　　五十嵐　　經

１１月１８日，仙台市泉区の七北田小学校が，３年間の文部科学省指定研究開発学校としての最終報告会を行った。大変興味深い内容なので研究主任を派遣したが，予想通りの成果を得てきた。研究開発課題は「社会の中で，よりよく生きる力を児童一人一人に育むために，地域と関わり，働きかける『体験活動と学習』を重視した教科を創設する教育課程の研究開発」で，一言で言えば，「地域共生科」という教科の創設である。

この教科では，〔地域を知る〕→〔地域を調べる〕→〔地域を考える〕→〔地域に発信する〕→〔地域で行動する〕→〔地域を知る〕→…というステップ及びサイクルでの学習を通して，「学習の社会的意義の実感」及び「自己肯定感の高まり」を育み，地域の活性化を図ろうというねらいである。そして，「地域共生科　学習指導要領」を作成し，目標に始まり，各学年の目標及び内容と続き，指導計画の作成と内容の取り扱いまで明記している。

もう気付かれた方も多いでしょう。「地域共生科」とは，学びの手応えと自立の気概を未来につなぐ，まさに「大館ふるさと・キャリア教育」そのものである。大館と仙台。共に東北の地にあり，共に同時期に発信しているが，偶然ではないと感じる。東北の地から全国へ，地域社会の自立に向けた学校の姿を力強く発信したいものである。

さて，題名の「名刺」である。公開全体会で七北田小学校長が，あいさつの中で次のようなことを述べたそうだ。「４月の学校経営方針を述べる時，開口一番こう言いました。『先生方，自分の名刺を３０枚持って，地域に配ってきて下さい。』」地域に配るということは，地域から名刺を３０枚集めてくることである。“抽象を具体で語る”とはこのことと強く感じた。名刺が，先生方の必須アイテムになる日が近いかもしれない。